



『雨の時はこんな地味な花も趣があっていいのよ』と言って  
玄関うちにお気に入りの竹の花器に挿して喜んでいたのを  
思い出す「ヤブミョウガ」の花

# 楽音

佛歴二五六五 西歴二〇二二

令和四年八月号

発行 楽音寺 住職 内藤睦雄

電話 090-3140-3931 (携帯)

0553-47-3475 (お寺)

FAX 0553-47-3495 (PC使用不可)

寺庭 090-8643-0852 (藤井牧子)

## 八・九月の楽音寺住職

八月十三～十五日 孟蘭盆会

石和甲府方面は十四日 塩田は十五日

先祖供養にお伺いいたします

ご都合を連絡ください

十四・二八日 坐禅会 朝六時三十分

九月一～二日 無相教会(御詠歌)研究会 本山

五、六日 九州東教区拡充大会

十五日 東京教区拡充大会

十九、二十日 和歌山教区拡充大会

二十～二六日 秋彼岸 (仏教週間)

二七、二八日 瑞巖寺講習会 宮城

十一・二五日 坐禅会 朝六時三十分

# 今月の掲示板

旅に居て

## 仏恋しや盆の月

今年の夏は六月末からたいへんな猛暑でしたから、八月の

立秋のころは、文字通りの装いを感じられるかと期待します。子供のころの八月はそれこそ暑さもピークでしたから、俳句の季語のひとつ月ほどずれたように感じる季節感には違和感でした。季語が新月の日を一日とし、満月の日を十五日として数える旧暦で決められているからですね。厄介だなと思いつつも俳句の季語は、それまで素通りしていた季節の微妙なうつろい、周囲の何気ない景色に大いなる興味を示し、面白いものとして、季節を感じるアンテナの感度を少しだけ高めてくれる気がします。



娘たちは「お母さんが玄関から『ただいまあ』て言って入ってきたのよ」なんて言っているけど、私には気配の毛の字もない。別に何らかの形で私の前に出てくることを期待するわけではないからいいのだけれど。そういえば父が晩年、「和子が外にいるから行ってやる」と言って夜中、電気がないと私らでも歩けない池のほとりを寝巻ですたすた行つて・・・。なんてこともありました。

女房がいなくなつて娘家族がそばにいて、何かと気を遣つてくれて有難いのですが、身の置き所なさというのはどうしようもないもの。今月の句を探していて「旅に居て」というフレーズに何となく共感するものがあつてこの句にしました。いままでは女房が掲示板の句を、時間をかけて歳時記などから探して決めていたので、きつと「この句はダメ」と彼女に言われそう。もうそろそろ聞きにくい繰り言とはおさらばしなければいけないのですが。

## 我逢人

道元禪師は、十三歳で当時日本仏教界最高峰の学問所だった比叡山で修行、「仏とは何か」「修行とは何か」という疑問を解決するために、さらに各地を歩いた。それは遠く禅の本場であった中国にも足を延ばしたのである。そこでついに、天童山景德寺の如浄禪師との運命的な出逢いを果たすことになる。二十六歳の時と言われている。その時道元は『まのあたり先師を見る。これ人にあふなり』ようやく私は本物の師と出逢うことができた、というストリートな表現が、今号の「我逢人」という禅語のいわれである。

私にも今だに親交のある音楽での師・友人、僧侶の世界での知人友人、御詠歌、それこそ思い起こせば多くの人に影響を受け、明らかに自分は「相変わらず」と言いながらも変わってきている。有難く思う。あの時、あの人と出逢っていなければ、と振り

返ることのできる出来事は、誰の身にも一つや二つあるだろう。

人と「あう」という漢字は、普通は「会う」。しかし「逢う」と記す男女の出逢いを匂わせるものもある。実際には、男女間に限定して使用されるわけではないが「特別な出逢い」を意味する。道元禪師は、求め求めてきた師、そして永年の疑問は「我逢人」によって腑に落ちるわけである。

足元に転がっているような些細な答えほど、遠くばかりを見る者には見つけられないもの。そのことに気付くきっかけとなったのは、出逢いにほかならない。出逢いは偶然ではあるかもしれないが、待っているだけでは訪れない。本気の人に出逢うには自分もまた本気でなければならぬように、互いに通じ合うものがなければ出逢いはない。偶然と必



然がちよつと交わるところに、出逢いはあるのだらう。中島みゆきの歌「♪縦の糸はあなた 横の糸は私 逢うべき糸に 出逢えることを 人は 仕合わせと呼びます♪」。

## 臨濟寺専門道場へ掛搭

苦手は正座とお経、その両方の不安が初日に。「はい、ここに座って」固い板の間に御座であった。正座が痛い。「お経」と言われ事前に想定して経本に付箋を挟んでおいたので、読もうとしたら「覚えてないの？ここはね、お経を覚えるところじゃないんだよ」暗に読めないなら出ていけ、という語気があつて、正直泣きたくなつた。それでもひと通り読み終え、多くの作法を習い、重ね茶碗を洗い終えてまた元の玄関で元の姿勢。お寺中に聞こえるようなため息をして時間を重ねた。

三月の夕刻は早く暗くなり、「今日はもう遅いのでこちらに投宿どうぞ」ほっとして案内されるがままに三疊ほどのじめつとした小部屋に通され、投宿帖に記して、見ると布団が置いてある。敷布団？聞くと広げて半分に寝て残りをかける「かしわ布団」という。とにかく眠れる。すると乾いた木を叩く音、それが雪のあがった冷たい外気に響いたかと思うと、遠くで読経。声は同じ音程ではない。音程を合わせることもしない、でも何か快い。父の実家の浄土真宗の寺のお経は聞き慣れていたがだいぶ違う。いや、そんなことよりとにかく寒い、体を丸めても足が寒い。風呂敷や衣を引きずり込んで、第一夜眠る。

### 編集後記

八月のお盆の棚経はほぼ例年通り伺います。ご都合についてはお知らせください。